

【一般演題2】 第10席 『甲乙経』における穴の主治證の研究・第二報

東京 篠原 孝市

古代中国の鍼灸法を考えていく場合、九鍼、補瀉、各種鍼灸法などとともに重要な研究対象となるのは、穴の主治證である。穴の主治證についての最古のまとまった記述は、いうまでもなく『甲乙経』巻之七以下に収められているそれである。その内容の考察は『銅人腧穴鍼灸図経』以下の主治證変遷の歴史を考えていくための前提でもある。

『甲乙経』の主治證の記述を取り扱う上での問題はいくつか考えられる。一つは本書と関係の深い後代の『千金方』『千金翼方』『外台秘要方』『医心方』及び楊上善注『明堂経』などとの記述の相違をどのように捉えるかである。この問題は、当然『甲乙経』の構成要素とされる古代の『明堂』の形態の構想とも関わる。主治證をめぐるもう一つの問題は、その記述自体が内包する問題である。そこにあらわれた言葉を単なる経験の集積の表現とし、残された問題はそれを現実の側に向かって開放するだけと考えるなら、その検討はある一定の水準以上には進まないであろうし、また実は現在的な問題に対する指南力ともなっていないと思われる。

本論では、『甲乙経』の主治證検討の一環として、主治證に使用されている用語の整理、及び主治證の構造に対する考察を行う。